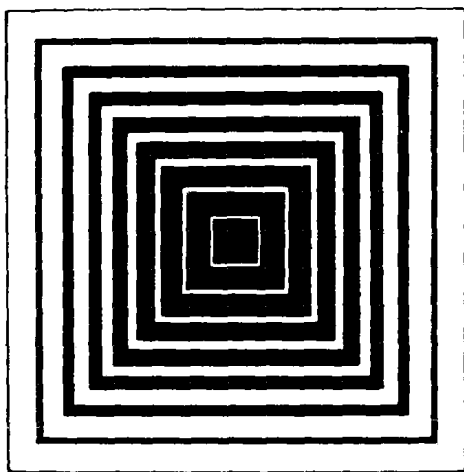


58



和泉式部・西行・定家

和泉式部集・山家集・長秋詠藻
拾遺愚草・金槐和歌集・式子内親王集・他



日本の古典—11

河出書房新社

日本の古典 11

和泉式部
西行・定家

昭和四十七年十月十五日 初版印刷

昭和四十七年十月三十日 初版発行

訳者 竹西寛子 他

装幀者 亀倉雄策

発行者 中島隆之

発行所 株式会社河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三丁目六番地

電話 東京(292)三七一一(大代表) 振替 東京一〇八〇二

印刷 凸版印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

製函 加藤製函印刷株式会社

本文用紙 本州製紙株式会社

クロス 日本クロス工業株式会社

定価 1100円

©1972



鞍馬寺奥の院への道

「わりなしやこほるかけひの水ゆゑに思ひ捨ててし春の待たるる」(西行)

目次 和泉式部・西行・定家

和泉式部集……………	竹西	寛子訳	一九	解	佐佐木幸綱	三
西行				挿	森田	曠平
山家集……………	宮	柊二訳	七	和泉式部集	奥村	土牛
藤原俊成				山家集		
長秋詠藻……………	大岡	信訳	三九	拾遺愚草	近藤	弘明
藤原定家				式子内親王集	堀	文子
拾遺愚草……………	塚本	邦雄訳	一七九	解説写真	榊原	和夫
源実朝						
金槐和歌集……………	山本	健吉訳	三五			
式子内親王集……………	辻	邦生訳	二五			
建礼門院右京大夫集……………	辻	邦生訳	二七			
小倉百人一首……………	池田弥三郎訳		四七			
〈作品鑑賞のための古典〉						
後鳥羽上皇						
後鳥羽院御口伝						
鴨長明						
無名抄	久保田	淳訳	七九			
賀茂真淵						
鎌倉右大臣家集の始に記せる詞						

抵抗としての断念

短歌について考えたり、短歌をつくったりしているとき

に、ふと、短歌の極北について思うことがある。短歌の窮極の理想型というか、幻の短歌の本質というか、そんなものの存在が思い浮ぶような気がして、心がひたすらそちらに向かおうとするのである。歌うべきは〈私〉および〈私たち〉のことであり、〈私〉をとりまく一切の現実であるはずなのに、したがって、そこからしか歌は出発しないはずであるのに、幻の極北の強力な魅惑が歌を誘発しているのではないかと思われて来るのである。そんな時の私は、おそらく遠くを見る眼差をしているにちがいない。〈私〉はもちろん、〈私〉の周りの一切が微小なものに見えて来る。現実の矛盾も価値も変化も、その相対的な側面ばかりが拡大されて見えて来る。そして、この誘惑に身をまかせたらおしまいだ、との思いと、この幻の極北の存在こそ〈私〉がかりうじて個人を越え得る契機なのだ、との思いにひき裂かれるのである。これは、定型詩型・伝統的詩型にかかわる者の宿命のようなものだろう。たぶん、自由詩を書いている人たちには、こうした経験はないにちがいない。

たかだか三十一拍といっても、われわれの思い及ぶ千年、二千年の単位から見れば、その語、その音には無数と

言っていい組合わせ方が可能である。また、五七五七七という型をとりあげてみても、そこに大雑把な類型は認められようが、意味内容と語の組合わせ方との関係で型がいかに多彩なひびき方をするかは想像を絶する。しかし、だからこそ、意味内容を負った言葉と音の集積は、型の機能が最大限に発揮されることで意味内容を極限まで増幅させられ、そのことで全体が一挙に変貌して新しい世界を照し出す、そんな理想的な言葉のひびき合いの場を、この型に想定したくなるのだろうか。

また、『万葉集』以来の何千の先進たちが、その時代時代の詩心をこの形式に托し、何百万もの作品を残していることも、幻の極北が思われる理由の一つだろう。様々の時代の、様々の個性が、様々な状況の中でうたいつつ、しかし、おのずからその全体が幻の極北を指し示している壮大な景観を思い浮べる。和歌史を、極北に向って四方八方から投げかけられる光の束として捉えることは可能である。



井出の里（京都府綴喜郡井出町）。山吹の名所であった。和泉式部「あちきなく思ひこそやれつくぐと独りや井出の山ぶきの花」、藤原俊成「駒とめてなほ水かはむ山吹の花の露そふ井出の玉川」。



私がこのようなことから書きはじめたのは、短歌の極北を思う私自身について思うとき、そこには意識しているいなかかわらず、中世の歌人たち、なかんずく藤原定家の宮為が色濃く影を落しているにちがいないからなのだ。

定家の歌論書を読むと、「歌の本意と存ずる姿」(『毎月抄』)とか、「及ばぬ高き姿」(『近代秀歌』)とかあって、あきらかに歌の極北を見つめていた定家という歌人の在りざまが想像される。ついでに言えば、島木赤彦の鍛錬道という作歌の捉え方も、「日来沈思して心肝を摧き」(『明月記』)などの定家の日記の一節を思わせる。定家こそは、「やまと歌の道あさきに似て深く」(『近代秀歌』)の自覚のもとに歌の極北を一点に見つめる遠くを見る眼差で、日夜、彫心鏤骨して作歌に励んだ典型的な歌人であった。

歌の極北。考えてみれば、これはなんと厳しく、しかも遠い眼差であることか。私はここで、直接には定家を思い出すのだが、同時に、それぞれの仕方ではるかな遠い世界



を見る中世歌人たちの眼差を思い起こす。荒涼たる現実を断念した者が、なお、真剣に生きようとするそれは目だ。中古王朝時代の歌人たちの「へながめ」の眼差には、どこか夢見るような、救いのあるあこがれがあった。中古王朝時代の美の世界、藤原俊成の言をかりれば、「艶」も「をかし」も「あはれ」も、あるいは「遠白し」もそうである。しかし、中世の「姿さび」「心ほそし」「あはれ深し」などになるとそうはゆかない。『新古今集』は三百年を距る『古今集』を理想に置きながら、暗澹たる「艶」、きびしい「あはれ」を現出せざるを得なかったのであった。

定家の父、俊成は九十一歳の長寿を保ったが、彼が率いる御子左家に対立した六条家グループの中心人物藤原清輔が没してから後の約三十年間は、名実ともに時の歌壇第一の実力者として重きをなした。定家は俊成四十八歳の時の子であるから、彼がものごころついた頃には、歌界はその父を中心に動いていたと見てさしつかえない。定家が上に

雲林院(京都市上京区紫野)。平安時代、都人の絶大な信仰を集めたが、中世になってから衰微し、大徳寺に合併された。この小堂は、大徳寺が遺跡の消滅を惜しんで江戸時代に建立したもので、旧名を辛うじて伝えるもの。源道済の歌「またみせむ人しなればさくら花今一えだを折らずなりぬる」は、雲林院の桜の枝を折って詠んだもので、この歌を贈られた和泉式部は、次のような返し歌を詠んだ。「いたづらにこの一えだはなりぬなり残りの花を風に散らすな」。

下は、貴船神社(京都市左京区鞍馬貴船町)。夫にうとんじられた和泉式部が、傷心をまぎらそうとしてこの神社に参詣し、「もの思へば涙のはたるもわが身よりあくがれ出づる魂(たま)かと思ふ」と詠んだことは有名。

述べたような短歌観を持つに至った理由の一つには、このような生れ育った環境もあったろう。彼は早くから秀れた歌をつくった。現在残っているのは十七歳の時の歌からであるが、二十歳の時の「初学百首」、二十一歳の時の「堀河院百首」で早くも歌壇の賞讃を得、新鋭歌人としてはなばなくデヴューしている。そして、四十代前半までを作歌一本に打ち込み、四十代後半からは歌論に、六十代に入る頃からは古典の書写校訂に励んでいる。感覚で、理論で、実証的な手触りで、ひたすら歌の極北を追い求めていった彼の姿勢を支えたのは、その生れ育った環境という負わされた宿命を受けて立つ覚悟だったろう。

しかし、もっと大きな要因として、定家が生きた時代社会の問題が考えられよう。

定家は応保二年（一一六二）に生れ、仁治二年（一二四一）に死んでいる。保元の乱の六年後、平治の乱の三年後に生れ、宝治の合戦の六年前に死んでいるわけである。言うまでもなく、保元・平治の乱は清盛が六波羅政権をとるきっかけとなった合戦であり、宝治の合戦は北条政権強化のくさびとなる合戦であった。貴族社会から武家社会へ移行するいわば過渡の時代であったわけで、旧勢力対新勢力のせめぎ合いを軸に、貴族社会が持ち越して来た問題あるいは手ざりりの武家政権の新しい問題等、あらゆる社会的な矛盾が表面化した時代であった。院政の矛盾、古代律令制の破綻、寺社勢力の問題、武家間の葛藤、鎌倉対京都の問題等々の問題が、地方在地実力者の思惑を背景にして、政治、経済、軍事、あらゆる手段でぶつかり合い、一気に解答が出されようとした時代だった。

遠いわれわれから見れば、没落する貴族階級と擡頭する武家階級が交錯しつつ自ら下降と上昇のグラフを描いてい



江口の里（大阪市東淀川区南江口町）。西行が、天王寺へ参詣の途中、雨が降り出したのでこの江口の里で宿を乞うたが、貸さなかったので詠んだ、という「世の中をいとふまでこそかたからめ飯のやどりを惜しむ君かな」の歌は有名で、新古今集にも採録されている。当時、江口は港として栄え、また、遊女の里として知られていた。この碑は、江口橋の近く、君堂という尼寺の中に建てられている。

西行庵（京都市東山区。平安朝の末、この地には雙林寺の塔頭蔡華円院があったが、西行は諸国行脚の途中、しばらくの間ここで草庵を結んだ。その後、蔡華円院は荒廃したが、西行の遺跡をしのんで、この西行庵が建てられた。



実の生活の場で、政治に全く無関係であり得るわけはない。実際の定家は執権に官位の昇進をのぞんだりもしている。また、後年のことであるが、一族御子左家の経済的地盤である荘園の問題を自分では解決しきれなくなつて、実朝にその解決を依頼したりもしている。身近かな日常生活に継起する問題の数々は、たとえそれが一荘園の出来事ではあつても、その根は、中世初頭という時代の問題をどうしようもないかたちで孕んでいたにちがいない。没落しゆく貴族階級の一員としての不安定な現在も、不安な未来も、「吾が事」のために定家は切る。切らざるを得ない。彼が

歌の極北を見つめる歌人であつた理由は、時代社会からはじき出された自分を自覚すること、その自覚を抵抗としての断念に捉え換える感性を持っていたからにほかならない。

定家について見て来たが、中世初頭の主だった歌人たちは、何らかのかたちで断念を経験していた。承久の乱失敗後、執念の如く『新古今集』切り継ぎに情熱を燃やし、「遠島百首」などの作品をのこした後鳥羽院などはその典型と言えようが、この本に収められた七人の歌人のうち中世を生きた六人も、時代社会の趨勢の中で、それぞれに積極的あるいは受身のかたちで断念を経験し、その断念をむしろバネにするかたちで作歌に向つてゐる。彼ら彼女らはみな、断念することを得た透徹した遠い眼差をもつてゐる。

ここで、彼らの生きた時代を概観しておこう。

永久二(一一一四)年 俊成生れる。
 元永元(一一一八)年 西行生れる。
 久寿元(一一五四)年 式子内親王生れる(?)。
 保元元(一一五六)年 保元の乱。
 保元二(一一五七)年 建礼門院右京大夫生れる(?)。
 平治元(一一五九)年 平治の乱。
 応保二(一一六二)年 定家生れる。
 仁安二(一一六七)年 清盛太政大臣となる。
 安元元(一一七五)年 源空、浄土宗創設。
 文治元(一一八五)年 平家滅亡。守護地頭設置。
 文治四(一一八九)年 『千載集』成立(?)。
 建久元(一一九〇)年 西行没する。
 建久三(一一九二)年 実朝生れる。頼朝征夷大將軍となる。

藤原俊成親子の画像。
 右、俊成。
 左、定家。



藤原俊成邸跡。
上、俊成社（京都市下
京区俊成町）。このあ
たりに俊成邸があった
と推測される。俊成の
忌日、十一月二十八日
には、町内の人々によ
ってお火焚祭が行なわ
れている。
下、俊成社の向いにあ
る新玉津島神社。俊成
が紀州和歌の浦から自
邸に、衣通姫・稚日女
命・思長帯姫の三柱を
勧請したもの。和歌の
守護神として崇敬され
た。

建仁元（一二〇一）年 式子内親王没する。

元久元（一二〇四）年 俊成没する。

元久二（一二〇五）年 『新古今集』成立。

承久元（一二一九）年 実朝刺殺さる。

承久三（一二二一）年 承久の乱。

貞承元（一二三二）年 建礼門院右京大夫没する（?）。

仁治二（一二四一）年 定家没する。

この簡単な年譜を見て、他の四人より早く、中古王朝末期に生れて中世初頭に世を去った二人、俊成と西行がともに晩年に充実した歌人であったことは、定家が壮年期までにその詩魂を燃え尽きさせた歌人だったことと思ひ合わせて、単なる偶然ではないような、時代社会と文芸の或る関係の在り方が想像されるが、今、この点に詳しく触れる用意がない。

俊成は、父の権中納言俊忠に十歳の時死なれている。當時の貴族社会では後だてとなるべき父がいなことは致命

的である。彼の初期の歌に不遇を嘆いた歌や失意をうたった歌が多いのを見てもわかるように、社会的栄達の道は早くから断たれていたのだった。二十代の作へ埋木となりはてぬれど山桜をしむころはくちずもあるかなの歌が、現実社会への野心の放棄と、俊成なりの「吾が事」の方向を明らかにしていると言えよう。彼はやがて仏教に心を寄せ、

春の花秋の紅葉の散るも見よ色は空しきものにぞ
ありける

いにしへのをのへの鐘に似たるかな岸うつ浪のあ
かつきの声

のごとき、現実の虚無的此岸からのはばたきを名作に結晶させる。彼はすでに遠くを見る眼差をしている。此岸ではなく彼岸をひたすら見ているかのごとくである。そして、六十三歳の年へ昔より秋の暮をば惜しみにし今年是我ぞ先だちぬべきと死を覚悟するほどの大病にかかり、実



際に出家して釈阿と称するようになる。『長秋詠藻』を自撰し、『千載集』を撰するの、歌壇の実力を発揮するの、この大病以後のことである。

鳥羽法皇の下北面の武士佐藤義清が二十三歳で出家、西行を名のるわけだが、その出家の直接の動機は明らかではない。〈惜しむとて惜しまれぬべきこの世かは身を捨ててこそ身をも助けめ〉へ世の中をそむき果てぬといひおかむ思ひ知るべき人はなくとも。前者は鳥羽院へ、後者は誰かわからないが「ゆかりありける人」へ、ともに出家の際の挨拶として贈った歌である。「ゆかりありける人」を恋人と見たてて出家の原因を失恋によると見る研究者もあるが、いまは、彼が世の中を断念したときの姿勢を見るにとどめておく。西行は後に〈世の中を捨てて捨て得ぬこちして都はなれぬ我が身なりけり〉と述懐する人である。また〈捨てしをりの心をさらにあらためて見る世の人に別れはてなむ〉とも歌う人間である。都や人が好きな人間なのだ。出家しながらも仏との対話だけで日を送ることは到底できないタイプの人であったのだ。下北面の武士時代の彼が、兵法や蹴鞠に秀れていたことも、こうしたタイプの人間のエピソードとしてふさわしい。理由はどうあれ、このような人間である西行が世を捨てるには、当時としては稀ではない生き方であったとしても、それ相当の決断があったろうことは想像される。

世の中のことが気にかかる彼だったから、また、縁の深かった崇徳院が保元の乱で讃岐に流されるという事件もあったりして、西行は出家の身ながら時代社会の変動を敏感に受けとめていた。この時代の歌人としては珍しく社会的事件に触発された感懐を歌にしている。そこでの彼が、たとえば義仲の死を「木曾と申す武者死に侍りにけりな」

厭離庵（京都市右京区嵯峨二尊院門前善光寺山町）。小倉百人一首を撰した定家の山莊跡といわれる。現在は尼寺となっている。

定家京極邸跡（京都市中京区寺町通二条上ル）。ここにあった屋敷は、息子の為家から、孫の為氏へと相続された。現在は「此附近藤原定家京極邸址」の碑が立っているのみである。

と、つき放して表現する旧世代的感覚に徹していた点がここで意味を持つてくる。彼は貴族社会の崩壊を眼前すること、現実の危機意識を普遍的な人間観に投影する。

さびしさにたへたる人のまたもあれないほりなら
べむ冬の山ざと

なきあとをたれとしらねどとりべ山おのおのすこ
きつかの夕暮

うなるごがすすみにならすむぎぶえのこゑにおど
ろく夏の昏臥^{どんご}

歌われた内容よりも、歌っている人間の方があざやかに浮んでくる点が西行の秀歌のきわだった特色だと私は見ているのだが、そしてこの点で彼の歌は当時の歌壇からはみ出しているわけだが、これらの歌を見ると、彼が自分の内側の底の底をはるかにしかし切実に見つめている様子が浮び上ってくる。「冬の山ざと」にいる西行も、墓原に立つ西行も、昼寝から覚めた西行も、見ているのは自分の内側である。そして自分の内側の一徹底には見える人間一般の生きざまを見つめようとしているのだ。世の中を断念し、自然を相手に数多くの歌をうたった西行だったが、激動する時代の動向とそこに噴出する数々の矛盾がどうしようもないかたちで個の存在を蹂躪してゆくなかで、彼は自然の中にぎりぎりの自分を見出し、そのことで時代社会に埋没されようとする個としての人間を見ようとしたのではなかったか。

式子内親王の伝記は未詳の部分が多いが、叔父の崇徳天皇、兄の以仁王、甥の安德天皇が動乱の犠牲になつており、彼女自身もその晩年近く八条院の呪詛事件と呼ばれる陰謀事件に巻き込まれ嫌疑をかけられたりして、病弱な、たぶん心やさしかったこの一女性も、過渡期のこの時

代社会の中では、平穏な一生を送ることはできなかったようである。彼女は「夢」「うたたね」の歌人と言われ、実らぬ恋をうたって秀れた歌人とされている。私の見るところ、在るものよりないもの、不在をうたって冴えた歌人であった。後鳥羽院の「もみもみとある様」との彼女の歌に対する評言がそのニュアンスをうまく捉えている。

来る日来る日を夢うつつの感じでむかえつつ漠たる何かをひたすら待っている彼女。しかし彼女は、彼女の生きる核であった待つことそのことを断念しているように見える。へ見えつるか見ぬ夜の月のほのめきてつれなかるべき
弟ぞ添ふへ玉の緒よ断えなば絶えねながらへばしのぶる
ことのよわりもぞする」といった珠玉の待つ、歌のうしろには、

見しことも見ぬ行末も仮初の枕に浮ぶまぼろしの
内

帰るかり過ぎぬる空に雲消えていかにながむ春
の行くかた

と、現在の待つ心をかろうじて支えているところの過去も未来をも打ち消す心が動いているのだ。

彼女は彼女の時間を断念している。明日が突然明るい日になることは絶対に無いことを感知している。本歌取りに没頭したのも、いわば虚の世界に遊ぶことで、現実の時間を脱出しようとした意志の表れとして捉えるべきだろう。

夢や不在に魅かれたのも、それが時間を超越した在り方だったからである。本歌取り、虚の世界、不在と並べてみて連想される瘦せた歌とは逆に、式子の歌にふくよかさとやさしさがそなわっているのは、時間を断念した人間の静かで遠い眼差がそこにあるからだ。

清盛の娘、中宮建礼門院に仕えた建礼門院右京大夫は、



箱根権現（上）と伊豆山権現（下）。いわゆる「二所権現」である。源実朝は、鎌倉幕府の祭祀的な司長として、しばしば二所詣をした。「春雨にうちそぼちつつ足曳の山路ゆくらむ山人やたれ」「旅をゆきし跡の宿守をれくにわたくしあれや今朝はいまだこぬ」など、二所詣にかかわる歌は少なくない。

平家全盛のころ、清盛の孫にあたる平家の若公達平資盛に恋をした。現実の恋そのものも彼女の恋心の激しさに比べれば淡いものだったようだが、ほどなく平家は滅亡、資盛も壇の浦で死ぬ。へなべて世のはかなきことを悲しとはかかる夢見ぬ人のいひけむ」とその悲しみをうたい、「神も仏も恨めしくさへなりて」と述懐し、へ行方なく我身もさらばあくがれむ跡とどむべきうき世ならねば」とこの世の我に情熱を失う。七夕の歌に異常な情熱をかたむけているのも、あるいは、彼女は地上に興味を失っていたからだと考えるかもしれない。

世世ふとも絶えむものは七夕にあさひく糸のながき契は

がき契は

天の川けふの逢瀬はよそなれど暮れ行く空をなほ

も待つかな

資盛を、全盛時の平氏貴族社会を、ひたすら思い返すこととで後半生を過した彼女の家族に、私たちは、一女性の視点から描かれた平家物語を読むような哀感を受けとるわけだが、彼女の側に立ってみるとき、その現実的でストレートな性格から見て、こういう七夕をうたったテーマ詠でも、自分を確かめる表現としての短歌という『右京大夫集』一巻の姿勢は貫かれていると見るべきだろう。

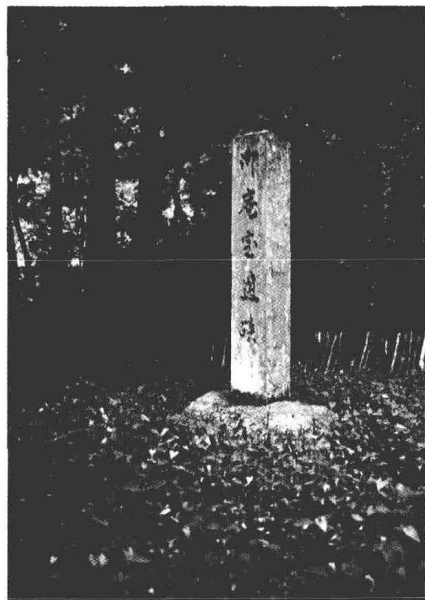
歌壇の圏外にあつて、失意の自分を確かめる歌をつくりつづけた彼女を支えたものは、彼女の理解の外にあった「恐ろしき武士ども」が動かしている「うき世」に、なお生きる精一杯の抵抗の心であったにちがいない。時かわり、武家社会になった後、歌を見せて欲しいと言つて来た定家に、へ言の葉のもし世にちらは忍ばしき昔の名こそとめまほしけれ」と、名前を出すなら旧時代の象徴たる建礼門院右京大夫の名を出して欲しいと頼んでいることも、こ

の推測を裏づけてくれる。

実朝については多くを言う必要はないだろう。父頼朝の死後、北条氏によって兄頼家が、実朝に近い武将たちが次々に殺され孤立化していった彼の現実を想像すればよい。彼が北条氏に一泡ふかせる具体的計画を持っていたかどうかは分らないが、その実現の不可能性は感じとっていたにちがいない。とくに、和田義盛が殺されてからは、わずかな可能性をも断念したであろう。へ世の中は鏡にうつる影にあれやあるにもあらず無きにもあらずへ老いぬれば年の暮れゆくたびごとにわが身ひとつと思ほゆるかな。たとえ先人の影響下にあったとみても、これらが二十歳そこそこの青年の歌であることを思い起こすとき、慄然とした感じを覚える。そして、鏡の中の虚像を言い、未来に写る過去をうたう言いようもない孤独の涯に立つこの青年



芦の湖（神奈川県西端）。源実朝「玉くしげ箱根の海はけれあれや二国かけてなかにたゆたふ」は、この芦の湖を詠んだもの。



が、文字通り遠くを見る眼差で自然に向うときの透徹した心の存りぎまに思い及ぶ。私は、同じく自然を素材にした歌でも、すでに有名な〈箱根路を……〉や〈大海の……〉といった小さきみな動きが視点を近よせて歌柄を小さくしている歌より、ゆったりとした大柄な歌をとる。政権奪還はもとよりその生命さえ断念していたろう青年が、逃げずに、或いは結果的に逃げられずに、その運命的な生の軌跡を進んでゆくとき、見るべき何が近くにあるだろう。

くれなるの千入のまふり山の端に日の入るとき
空にぞありける

玉くしげ箱根のみ海けけれあれや二国かけて中に
たゆたふ

ここに寓意を見る必要はない。実朝の遠くを見る眼にうつった空の、湖の、透徹した無音の世界を感じとるだけでよい。彼の短い一生は、私たち現代人が使う矛盾といった言葉などを受けつけない種類のものだったろう。さらにまた、囲りに血なまぐさい事件が頻発しながらも、私たちが想像するよりはるかに実朝の心は森閑としていただろう。子供が出来なかったことも原因の一つと考えられようが、彼は、無能な政治家として時代に対処することで運命をひき受けたのだった。むしろ積極的な断念があったと私には思われる。矛盾を超越した森閑が彼の歌にあるのはその為だろう。

ごく簡単に、六人の歌人たちがその生きた時代との関わりによってそれぞれの仕方の断念を経験し、そのことが遠くを見る眼差として作品に反映されていたのを見て来た。

言うまでもなく、俊成は『千載集』の、定家は『新古今集』の撰者であり、当時の歌壇の中心をなす専門歌人であ

長楽寺（京都市東山区）文治元年、建礼門院が僧印誓について剃髪した寺。

寂光院（京都市左京区）本堂の左手にある、建礼門院御庵室遺蹟。剃髪した建礼門院は、ここに隠棲し、さびしい余生を送った。



った。他の四人は、俊成、定家のどちらか、あるいはその両方に往来はあったけれども、むしろ歌壇の圏外にあった人たちだった。したがって、歌作が生活の中で占める位置はそれぞれに異っており、自分にとっての歌つまり作歌に対する姿勢もそれぞれであった。古典和歌との親疎関係もまた各々がっていた。

また、へ絢爛たる幻想美をくり抜ける歌人定家」とか、へ孤独の悲哀をしみじみと歌った式子内親王」とか俗に言われるように、その作品が指し示す詩の世界は多彩である。それを一括して一方向から照らそうとする私の試みは、だから、無謀と言えは言えるだろう。

しかし、それでもなお、私には中世歌人たちの一様に遠い眼差とその眼をそうあらしめた抵抗としての断念が、それぞれ個性的な特質の底にどっしりと重く置かれている気がしてならないのだ。もちろん、そのよるところは源空の浄土宗と表裏をなす時代と個人の関係である。乱世を生

きる生命の問題である。

歌論に言及する紙幅はないが、中世歌論の出発点とも言うべき俊成歌論の中核的ボキャブラリー「へ幽玄」が、遠くかすかなことという通常の解釈のもう一つ向うに、不易なもの本質的生命的なものを原義的に指していることを久松潜一氏の『中世和歌史』で教えられたときの新鮮な驚きをい思い出していることをつけ加えておこう。

最後に少し視点を換えてみよう。

歌を「へ対詠歌」と「へ独詠歌」に分けてみせたのは斎藤茂吉だった。また、窪田空穂は「へ実用性」と「へ文芸性」の二面で歌を捉えようとした。この捉え方は古典短歌を見てゆく場合かなり有効である。ところが、近代以後の短歌には全く「へ実用性」がなく、しかも「へ独詠歌」全盛の時代をむかえている今日の状況の中では、「へ対詠歌」あるいは「へ実用性」を持つ歌の理解はなかなか行き届きづらい。

今まで見てきた中世短歌の世界は題詠全盛の時代だった。百首歌、歌合せの歌を含めて、それは「へ独詠歌」であり「へ文芸性」を第一に置いた歌でもある。定家の「へ有心」も、美的認識の質に於て、存在そのものの状況に於て、一瞬の感情の動きに於て、感覚の切れ味に於て、先人の歌と対決する場面に於て、「へ自己を確認する心」という「へ心」の在りさまを前提にしたものであった。この時代になると、恋の歌さえきわめて自照的である。相手に呼びかけるかたちをとっても、それを聞いているのは恋の相手ではなくしばしば自分自身であった。恋愛に於ける自己確認も、二人の間の緊張関係の中とはいえないじりしく自分にその比重が置かれた場面でなされる。「へ心」と「へことば」の裂け目を孤独の中で埋めてゆかなければならない。そこ

建礼門院に近侍した女房たちの墓。向って左から、建礼門院右京大夫・治部卿の局・大納言佐の局・阿波の内侍。御庵室遺蹟（前ページ参照）の対斜面にひっそりと並んでいる。